

在日コリアンの方言接触 —二世の事例研究—

Korean Dialect Contact in Japan :
A Case Study of Second Generation Korean Immigrants

吉田 さち・松本 和子

YOSHIDA Sachi & MATSUMOTO Kazuko

要 旨

在日コリアンのオールドカマーにおける朝鮮語の方言接触に関しては、金美善（2001）、康貞姫（2003）、宋実成（2010）等により、朝鮮語方言は二世以降にも朝鮮語および日本語との接触を経て変容を遂げながら保持されていることが明らかにされてきた。これらの研究は、大阪府生野区に集住する済州道方言の話者を主な対象とした研究や関西在住の話者を対象とした事例研究であり、戦前から移住人口が圧倒的に多い慶尚道出身者の方言接触とそれに伴う変容に関する研究は、管見の限り行われていない。また、関西に次いで在日コリアンが集住する首都圏における方言接触の研究は行われていない。そこで筆者らは祖国からもたらされた慶尚道方言が日本の地で朝鮮語の諸方言や日本語と接触した結果どのような変容を遂げているかを探るため、首都圏に在住する慶尚道出身者二世の朝鮮語の語彙・音韻に関する調査研究に着手した。本稿では途中段階の報告として、首都圏に在住する慶尚道出身の二世の事例について定性的に考察した。その結果、調査対象者の音声面において、慶尚道の方言的特徴である半母音/j/のゼロマーキングおよび軟口蓋音の口蓋音化の事例が確認され、語彙に関しては古い語彙の化石化が観察された。今回得られた知見をもとに、今後は松本・奥村（2019）の方法論を援用した定量的分析を行い、方言接触についての理論検証を行う必要がある。

1. はじめに

移民のコミュニティにおいて、現地の言語と祖国からもたらされた言語間の接触・あるいはコミュニティ内での諸方言間の接触は、普遍的な現象として知られている。言語接触に関する理論については、世界のさまざまな言語変種をもとに盛んな議論が行われている（松本・奥村 2019）。

在日コリアンのオールドカマーにおける朝鮮語の方言の接触について分析した研究は数少ないが、

大阪府生野区周辺における音韻変異の使用実態について話者の属性や社会的環境との相関に注目して考察を行なった金美善(2001)、大阪在住の済州道方言話者集団の日本語との接触現象について扱った康貞姫(2003)、一世と二世の方言話者の方言継承と要因についての事例研究を行った宋実成(2010)等が存在する。

金美善(2001)は、生野周辺の一世の自然談話に見られる音韻変異の使用実態を話者の属性や社会的環境との相関に注目して考察した。その結果、一世の間で見られる日本語の音素[ts]と[s]を音韻論的に区別しない現象の生起と定着には、話者の習得の形態より、日本語母語話者との接触の程度や母語を同じくする話者で構成されるコミュニティの有無といった社会的環境が大きな要因であることを明らかにした。

康貞姫(2003)は大阪に在住する済州道方言話者33名を対象に、方言の保守形[e]音の保持状況について、面接・第三者との対話等により収集したデータを用いて調査した。その結果、70歳以上の高齢者集団では保守形の[e]音が70%以上現れたが、戦後一世集団である60年代に移住した60歳以下の中年層においては、この音価が移住当時の改新形を使っていること等が明らかになった。

宋実成(2010)は、幼少期に渡日した一世5名と日本生まれの二世18名を対象に、彼らの発話について音韻・文法・語彙の側面から検討し、彼らが朝鮮語方言話者であると結論づけた。その要因について当時の証言や文献を分析した結果、集住地である「朝鮮部落」のなかで朝鮮語を使って生活しながら、民族教育、会合、集会、公演、朝鮮語で書かれた新聞・本等を通じて、父母の使っていた朝鮮語方言を維持することができたのだと説明している。同時期に生まれ育ち方言を継承しなかった二世との違いはどのような点なのかについては今後の課題として残されている。

最後に金由美(2005)は関西在住の二世と三世代の朝鮮語の語彙の残存状況を調査したものであるが、方言形式が観察されたため、ここで概略を記す。金由美(2005)は、二世以降の朝鮮語の語彙の残存状況を明らかにするために関西在住の二世と三世を対象に行ったケース・スタディを行った。二世に関しては観察による使用語彙の記録、三世に関しては調査者自身の内省による使用語彙の記録を行った。調査時には、二世の両親の出身である慶尚北道の方言の使用が観察されたという。使用語彙としては、「親族名称」「祭祀に関わる名称」「日本語に表現形式が存在しないもの」が多く観察されたが、加えて、「食生活に関わる名称」「性向語彙」の使用も見られたという。在日コリアンが保持する語彙と風習・食習慣には深い関係があると説明されている。

上記の研究から、朝鮮語方言は二世以降にも朝鮮語および日本語との接触を経て変容を遂げながら保持されていることが示唆される。

ただし、上述した研究は、大阪府生野区に集住する済州道方言の話者を主な対象とした研究や関西在住の話者を対象とした事例研究が中心となっている。

戦前より移住人口が圧倒的に多い慶尚道やその他の地域の方言との接触、それに伴う変容に関する研究は、管見の限り行われていない。また、関西に次いで在日コリアンが集住する首都圏における方

言接触の研究は行われていない。

そこで、筆者らは、祖国からもたらされた慶尚道方言が日本の地で朝鮮語の諸方言や日本語と接触した結果どのような変容を遂げているかを探るため、首都圏に在住する慶尚道出身者二世の朝鮮語の語彙・音韻に関する調査・研究に着手した。本稿では途中段階の報告として、首都圏に在住する慶尚道出身の二世の事例について考察し、方言接触への理論構築への貢献の可能性を示す。

2. 人口統計学的な背景

2-1. 在日コリアンの定義

本章では、在日コリアンの定義と本研究の対象を踏まえ、人口統計学的な特徴について概観する。

本稿における「在日コリアン」とは、日本に暮らしている韓国籍・朝鮮籍を持つ人々の総称とする。在日コリアンは、来日時期によって「オールドカマー」と「ニューカマー」に分けられる。ここでは、生越（2005）等を参考に、「オールドカマー」を「日本が朝鮮半島を植民地にしていた時代（1910～1945）前後に来日した人たちとその子孫」と定義し、「ニューカマー」を「1980年代以降にビジネスあるいは結婚、留学等のために来日した人たちとその家族」と定義する。本研究の調査対象はオールドカマーの二世に当たる。

2-2. 人口の推移

戦前から戦後まで、在日コリアンの人口の推移について概観する。図1は、1911年～2015年までの韓国籍・朝鮮籍を有する人口の推移を示したものである。

まず、図1を戦前から見ていくと、1910年代まで数千人規模だった人口が、1930年から1940年にかけて激増していることが見てとれる。在日本大韓民国民団は、この期間の人口変動に次のような質的な変化があったと指摘している。1910年代までは留学か商用で渡日する人が大半だった。その後、1930年代以降は、植民地支配下における祖国での生活苦から労働力として渡日するようになり、1940年代になると、生活苦と徴用等戦争遂行等が混在したという。

さらに、図1から、終戦後に人口が激減したことが伺える。在日本大韓民国民団によると、在留者は1946年には50万～60万人に激減したという。図1からも、1945年から1950年にかけて人口が半数以下に落ち込んだことが確認できる。

その後、人口が最も多くなるのが、1980年代中盤から1990年代初めにかけてである。1989年に韓国の海外渡航が自由化され、ニューカマーが増加する時期と重なる。1990年代中盤からは人口が減少しているが、在日本大韓民国民団によると、人口減少の原因は帰化者や死亡者の影響だけでなく、国籍法も影響しているという。

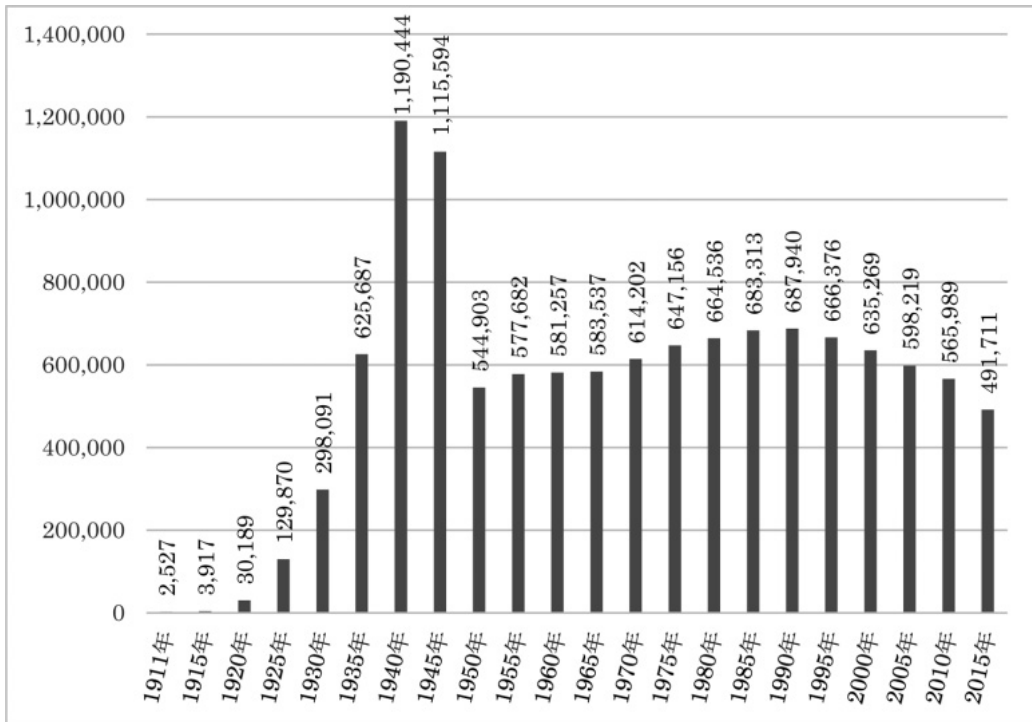


図1. 人口の推移（法務省参照）

2-3. 出身地

戦前に来日したオールドカマーの一世は、日本に地理的に近い、慶尚道、済州道、全羅道といった朝鮮半島南部地域の出身者が多い。在日朝鮮人集住地域でもこれら同郷者を中心とした地域的住み分けも見られ、地域によっては一世の出身地の方言が残存・保持されることも珍しくないと言われている（金美善 2010）。

本節では、戦前、近年の出身地はどのような地域が多かったのかについて考察する。

表1は、戦前の1937年当時の在日コリアンの本籍地を地域ごとに示したものである。最も人口の多い道から、慶尚南道、慶尚北道、全羅南道、全羅北道、忠清南道の順となっている。これらの五道を地図上に濃色で示したものが図2である。

表1. 在日朝鮮人本籍地別調査表
1937年（昭和12年末）
（坪江 1965参照）

	本籍地	人口数
1	慶尚南道	282,143
2	慶尚北道	164,779
3	全羅南道	161,407
4	全羅北道	39,393
5	忠清南道	23,909
6	忠清北道	20,176
7	京畿道	13,214
8	江原道	7,463
9	平安南道	6,316
10	平安北道	4,001
11	黄海道	5,028
12	咸鏡南道	5,302
13	咸鏡北道	2,554
-	不明	4
	総数	735,689

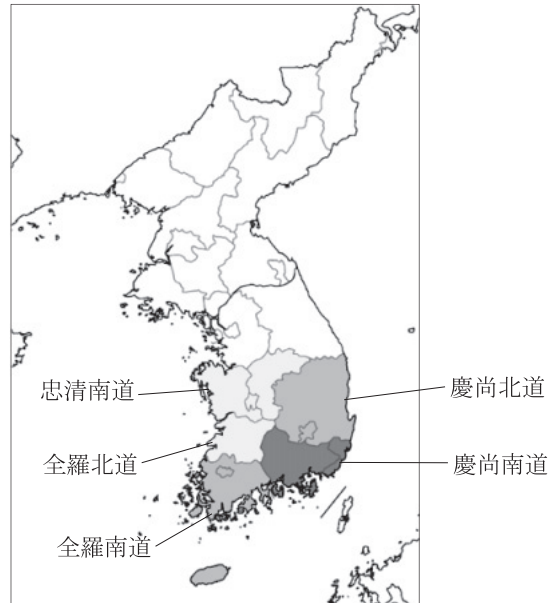


図2. 人口上位5位の道1937年（昭和12年末）

表1から、慶尚道、全羅道¹の出身者が特に多いことが分かる。

韓国政府国家記録院²によると、当時、地理的な要因と親類・知り合い等の社会的ネットワークにより、同じ地域の出身の移民たちが日本で同じ地域で共に暮らし、働いていたという。

表2は、法務省（2012）を参照し、2011年時点の本籍地を示したものである。最も人口の多い道から順に、慶尚南道、慶尚北道、済州道、ソウル特別市、全羅南道の順となっている。これらの道・市を地図上に濃色で示したのが図3である。

1 当時、済州道は全羅南道に属していた。

2 「在外韓人の歴史 日本に在日韓人」<http://theme.archives.go.kr/next/immigration/underJapaneseimperialism.do>

表2. 都道府県別本籍地別外国人登録者（その2 韓国・朝鮮）
（法務省 2012参照）

	本籍地	人口数
1	慶尚南道	148,496
2	慶尚北道	109,702
3	済州道	86,231
4	ソウル特別市	60,161
5	全羅南道	35,418
6	京畿道	32,160
7	釜山直轄市	25,103
8	忠清南道	10,306
9	全羅北道	9,521
10	忠清北道	8,531
11	その他	7,100
12	江原道	4,365
13	光州直轄市	2,314
14	大田直轄市	2,267
15	不詳	1,248
16	咸鏡南道	586
17	平安南道	573
18	黄海道	530
19	平安北道	340
20	咸鏡北道	286
21	平壤特別市	87
22	黄海南道	25
23	開城地区	17
24	兩江道	13
25	慈江道	12
26	黄海北道	9
	総数	545,401



図3. 人口上位五位の道2011年

表2から、2011年においても慶尚道出身者が最も多いことが分かる。また、済州道出身者も多いことが見て取れる。

表2の人口には、1980年代以降に来日したニューカマーも含まれている。ニューカマーはソウルを中心に各地の出身者がいると言われている（金美善 2005）。表2で、第四位にソウル特別市、第六位に京畿道があるのも、ニューカマーの出身地と関係がある可能性がある。

2-4. 居住地

2018年末現在、在日コリアン³は約48万人で在留外国人の17.5%を占める（法務省 2019）。在留外国人のうち中国籍の人々に次ぐ大きなコミュニティを形成している。

表3は在日コリアンの人口の多い都道府県のうち上位10都道府県を挙げたもの、図4は在日コリアン⁴の人口の多い都道府県を濃色で示したものである（法務省 2019参照）。

表3. 在日コリアンの人口の多い都道府県（上位10都道府県）
（法務省 2019参照）

	都道府県	人口		都道府県	人口
1	大阪府	100,430	6	京都府	23,930
2	東京都	94,644	7	千葉県	15,995
3	兵庫県	39,432	8	埼玉県	15,960
4	愛知県	30,010	9	福岡県	15,617
5	神奈川県	28,259	10	広島県	7,507

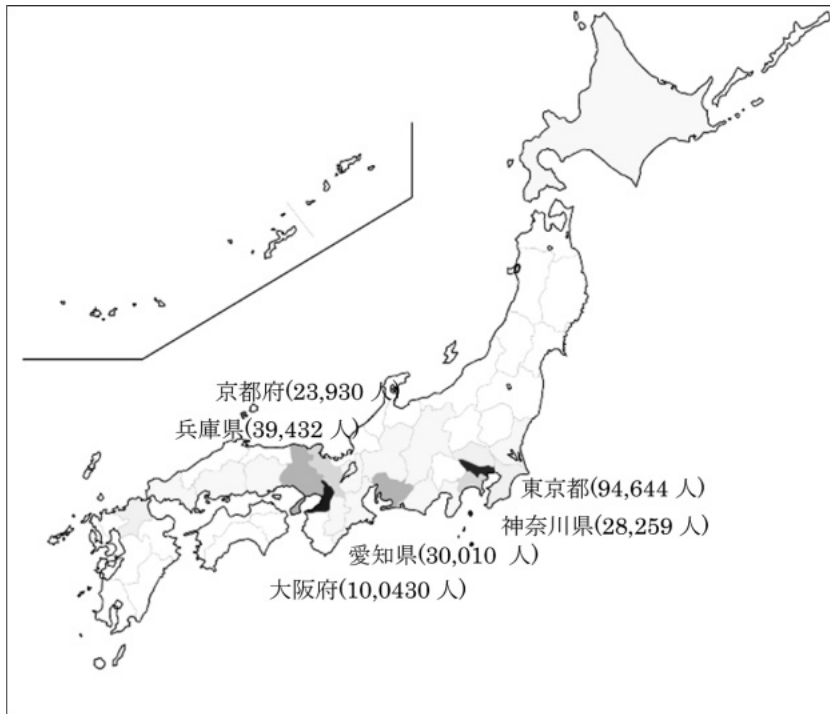


図4. 在日コリアンの人口の多い都道府県（法務省 2019参照）

3 韓国籍の人の人口（449,634人）と朝鮮籍の人の人口（29,559人）を合計したものである。

4 都道府県別人口については、資料が入手できた韓国籍の人々の人口のみ示している。

人口の多い都道府県から順に、大阪府、東京都、兵庫県、愛知県、神奈川県、京都府、千葉県、埼玉県となっている。表3から、東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県等の首都圏にも多くの在日コリアンが居住していることが分かる。

3. 方言的背景

3-1. 朝鮮半島の方言区画

李翊燮・李相億・蔡琬（2004）によると、現在までもっとも広く通用している朝鮮半島の方言区画は、以下の図5のように、平安道方言、咸鏡道方言、中部方言、全羅道方言、慶尚道方言、済州道方言という六つの区画であると言われている。これはほぼ小倉進平（1940, 1944）に従ったものだという。

この地方の名称は、日本の都道府県にあたる行政区画である、「道」を南道と北道に分ける前の行政区画である道の名称をとってつけられている（李翊燮・李相億・蔡琬 2004）。ただし、「中部方言」

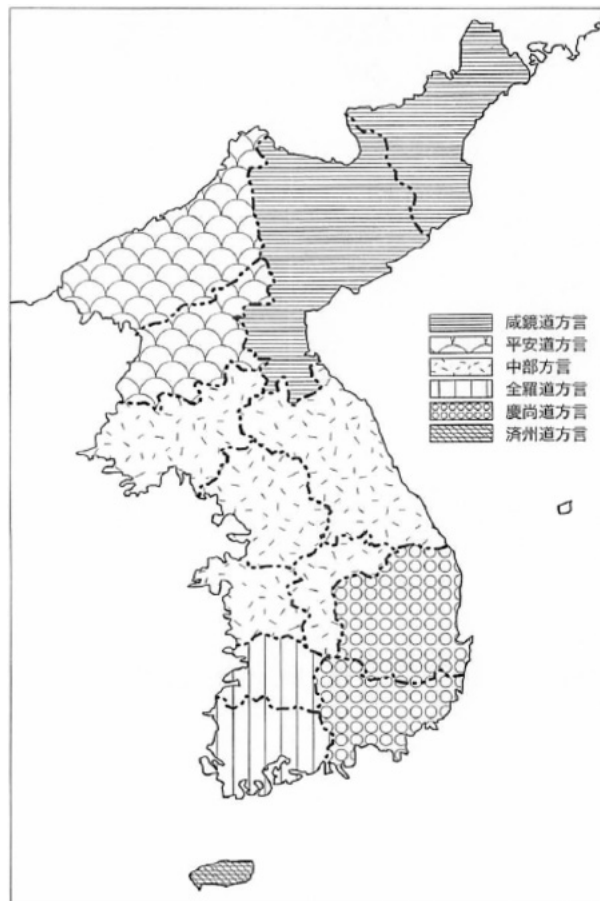


図5. 朝鮮半島の六大方言（李翊燮・李相億・蔡琬（2004）より引用）

のみは、京畿道、江原道、忠清道、黄海道がひとまとめにされている。

本稿で分析の対象とする慶尚道方言の分類について、李翊燮・李相億・蔡琬（2004）は、慶尚道方言と全羅道方言をまとめて南部方言と呼んだり、慶尚道方言や全羅道方言を、それぞれ慶尚南道方言、慶尚北道方言、全羅南道方言、全羅北道方言に分けたりすることもあると述べている。

本稿では、当時の移民の割合を知る唯一の情報源である人口統計が行政区画ごとにしかないため、図5の方言区画に従い、慶尚道出身の二世の発音・語彙について考察する。

4. 調査の方法

4-1. 調査の概要

今回の調査の目的は、首都圏に在住し、父母がともに慶尚道出身であるオールドカマーの二世において、一世にもたらされた慶尚道方言がどのように変容しているかを探ることである。

本稿では、二回に分けて実施した調査を事例として考察する。一回目の調査は、2019年7月7日に、埼玉県のインフォーマントの自宅で行い、二回目の調査は、2019年7月9日に、新宿で行われた慶尚北道道民会の会場で実施した。

調査方法としては、アンケートおよび語彙調査を用いた。アンケートおよび語彙調査の詳細については後述する。

調査協力者は、首都圏在住で、父母がともに慶尚道出身である在日コリアン二世6名である。6名の基本的属性は表4の通りである。

表4. 調査協力者の基本的属性

	話者1	話者2	話者3	話者4	話者5	話者6
性別	女性	男性	女性	女性	女性	女性
生年（歳）	'41年（78）	43年（75）	33年（86）	34年（85）	41年（78）	39年（80）
居住地	埼玉県	埼玉県	東京都	東京都	東京都	東京都
父母の出身地	父母：慶尚北道	父母：慶尚南道	父母：慶尚北道	父母：慶尚北道	父母：慶尚南道	父母：慶尚南道

表4から、6名全員の共通点として、慶尚道出身の一世の父母を持ち、親を通じた朝鮮語の習得経験が存在したということがうかがえる。

4-2. 調査語彙の選定

【基礎資料】

調査語彙の選定にあたり基礎資料としたのは、小倉（1944ab）『朝鮮語方言の研究』を地図化した

中井・亀山 (2007)、福井 (2017, 2018) である。

小倉 (1944ab) は、1910年代から1930年代にかけて朝鮮半島全土で行った方言調査の結果を集大成したものである。小倉 (1944ab) を基点として用いる意義は、オールドカマー一世の移住当初の祖国の方言分布が分かることにある。移住者の方言変容の分析においては、現在の祖国の方言・標準語との比較だけでなくむしろ、移住当初の方言との比較を行うことが重要だと言われている (松本 2016)。その点で、小倉の資料を基点とすることは有意義だと言える。

小倉 (1944ab) を基にした2つの言語地図に中井・亀山 (2007)、福井 (2017, 2018) がある。本稿では、この2つの言語地図を基礎資料とする。中井・亀山 (2007) は、小倉で報告された調査項目から、特徴的な方言分布を示す230項目を言語地図化した資料である。また、福井 (2017, 2018) は、小倉の調査項目の中で、言語地図化に適した約200項目から、第一集では33項目、第二集では31項目について言語地図と語彙の歴史・解釈を示したものである。

【語彙選定の手順】

調査語彙の選定の手順は以下のように行った。

まず、本研究で基礎資料とした、中井・亀山 (2007)・福井 (2017, 2018) から、慶尚道方言の音韻・語彙の特徴が見られること、日常生活でよく使われる語彙であること、という2つの基準を満たす62項目を選定した。

次いで、この62項目に加え、金由美 (2005)・金美善 (2001) 等や在日コリアン四世へのインフォーマルなインタビューを参考に、オールドカマー独自の音韻・語彙の特徴が見られる語彙・表現54項目を選んだ。

その他に20語を加えた計123項目を今回の調査語彙とした。

4-3. 語彙調査の方法

語彙調査では、インフォーマントには、「普段、家族や同郷の親戚と話すときの言い方」を教えてくれるように、調査の冒頭で依頼した。

質問方法は翻訳式となぞなぞ式を併用した。

翻訳式の質問では、例えば、「嫁のことを何と言いますか。」等のように日本語で単語を示し、それに相当する朝鮮語の単語について発音してもらった。思いつかない場合には、調査者が予想される語形を複数列挙し、思い出した場合に発音してもらった。

なぞなぞ式の質問では、写真やイラストを提示し、例えば、「この食べ物は何と言いますか。」のように質問した。答えが出ない場合は、翻訳式の時と同じように、調査者が予想される語形を複数列挙し、思い出した場合に発音してもらった。

5. 考察

進行中の研究の中間報告として、本章では各話者の言語使用の変遷をまとめ、音声面と語彙面で特に際立った特徴について定性的に記述していく。

5-1. 話者1の定性的分析

【言語使用歴】

話者1は、東京都で生まれ育ち、30歳頃から埼玉県に居住している。15歳まで暮らしていた地域に、家族や親戚も含めて同胞が多く暮らしていた。当時近所に住んでいた同胞の出身地は分からない。親が仕事をしていたため、祖母が主に育ててくれた。祖母は朝鮮語のみを話し、母は日本語と朝鮮語を半々の割合で使用していた。祖母と母は互いに朝鮮語で話し、近所では朝鮮語と日本語を半々の割合で使っていた。話者1は、祖母や母が話している朝鮮語を耳にして覚えてきた。

日本の学校を卒業し、民族学校には通っていない。

韓国には、祖母の墓参りや観光に、年2～3回訪問する。韓国に行くことばが通じないが、「田舎に行くと、片言の田舎のことばが分かるので、話していると意味が分かってくるんですよ。」と話す。標準語を使う若い人とは話が通じないが、方言を話す高齢者とは会話できるという。

現在、日常的に使う言語はほぼ日本語である。親戚付き合いでもほぼ日本語を使用する。韓国の映画やドラマは好きでよく見ている。同胞の集まりには誘われたら行くようにしている。

【音声面】

話者1は、「骨」(뼈, [pʰjɔ])、「ヤンニョムジャン」(양념장, [jaŋ-njɔm-dʒaŋ])、「かんざし」(비녀, pi-nyɔ)、「嫁」(며느리, [mjɔ-nw-ri])の各単語の発音において、慶尚道方言の音韻的特徴である半母音/j/のゼロマーキングが見られた。趙義成(2007)は「慶尚道方言では半母音の出現に制約がある」とし、「概して、/j/は語頭、母音間ではよく表れるが、子音・母音間では現れないことが多い」と説明している。

具体的に見ていく。「骨」の標準的発音は[pʰjɔ]であるが、[pʰe⁻²ta-gu]と発音されている。「ヤンニョムジャン」の標準的発音は[jaŋ-njɔm-dʒaŋ]であるが、[jaŋ-nim-dʒaŋ]・[jaŋ-niŋ-dʒaŋ]と発音されている。「かんざし」の標準的発音は[pi-njɔ]であるが、[pi-ne]と発音されている。「嫁」の標準的発音は[mjɔ-nw-ri]であるが、[mi-nw-ri]と発音されている。

さらに、慶尚道方言の音韻的特徴として、軟口蓋音の口蓋音化の事例が観察された。趙義成(2007)は、これについて「慶尚道方言には、軟口蓋音の口蓋音化が広く見られる」と述べ、「軟口蓋音/ㄱ, ㅋ, ㆁ/の直後に母音/ㅣ/あるいは半母音/j/が来るとき、軟口蓋音はそれぞれ/ㅈ, ㅉ, ㄲ/と発音される。」と説明している。

具体的には「キムチ」(김치, [kim-tʰi])が[tʰim-tʰi]、「油」(기름, [ki-rum])が[tʰi-run]、「縫

う」(깊다, [ki:p-²ta]) が⁵ [tʃi:p-ho-i-bu-ra]、[tʃi-bo-i-bu-ra]、「深い」(깊다, [ki:p-²ta]) が⁵ [tʃi-p^hu-da] と発音されている。

【語彙面】

「トイレ」、「風呂」において古い語彙の化石化が見られた。現代朝鮮語では、「トイレ」は「화장실」が用いられ、「변소」([pjɔn-sol]【便所】)はほとんど用いられない。「風呂(に入る)」は「목욕(을하다)」が使用され、「목간」([mo^k-²kan]【沐間】)はほとんど用いられない。話者1は「トイレ」を「변소」([pjɔn-sol]【便所】)、「風呂」を「목간」([mo^k-²kan]【沐間】)と言うと回答している⁶。在日コリアンの家庭においてこれらの古い語彙が化石化して残っている可能性が示唆される。

5-2. 話者2の定性的分析

【言語使用歴】

話者2は、大阪府で生まれ育ち、進学のために上京した。大阪では、周囲に同胞が多くいたが、圧倒的に済州道の出身者が多かったという。話者2の父母は二人とも慶尚南道の出身であるため、家庭内では慶尚道方言が使われていた。父母・祖父母が日常語として慶尚道方言を使っているのを聞いて習得した。家庭内で使用される慶尚道方言と周囲の人の話す済州道方言との違いを子どもの頃から認識していた。当時、済州道方言は理解できなかったという。

日本の学校を卒業し、民族学校には通っていない。朝鮮語の標準語を身に付けたきっかけは大学時代で、韓国からの留学生にも教わった。大学卒業後、教員として民族学校で教えた経験がある。

韓国には年2回以上、頻繁に行き来する。方言を話すのでソウルの人とはことばが通じないという⁷。

現在、日常的に使うのは日本語が中心で、ソウル出身の妻とも互いに日本語で話す。親戚ともほとんど日本語で会話する。同胞の行事・集まりには、妻の関係で年に1~2回程度参加する。

【音声面】

「ヤンニョムジャン」(양념장, [jaŋ-njɔm-dʒaŋ])、「嫁」(며느리, [mjɔ-nw-ri])の各単語の発音において、慶尚道方言の音韻的特徴である半母音/j/のゼロマーク化が見られた。「ヤンニョムジャン」の標準的発音は[jaŋ-njɔm-dʒaŋ]であるが、[jaŋ-nim-dʒaŋ]と実現され、「嫁」の標準的発音は[mjɔ-nw-ri]であるが、[me-nwul]・[me-nw-ri]と実現されている。先述した話者1で半母音/j/のゼロマー

5 動詞「縫う」の終止形ではなく、「縫って着なさい」という形で回答されていた。

6 趙義成は、「趙家の朝鮮語」(<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/choes/bibimbab/Jurijib.html>)において、在日コリアンの家庭である趙家で用いられる単語の例として「변소」「목간」を挙げている。

7 しかし、語彙調査においては、単語によっては標準形でも答えている。ソウル出身の妻のことばの影響もあり方言形だけでなく標準形も理解・使用しているように思われる。

キングが見られた「骨」(뼈, [pʰjo])は標準形で発音されている。話者2は話者1と比べて半母音j/ゼロマーク化の実現が少ない。

話者2においても、慶尚道方言の音韻的特徴である軟口蓋音の口蓋音化が観察された。具体的には「油」(기름, [ki-rum])が[tʃi-rum]と発音されていた。なお、「キムチ」(김치, [kim-tʃʰi])は標準形で発音されていた。

話者2においては、方言形が比較的少ない一方で、時折標準形で回答されていた。これに関しては、ソウル出身の妻が親類や友人等と朝鮮語で話している場に遭遇する機会にあふれているため、標準形を無意識的に習得した可能性がある。あるいは大学時代の学習や民族学校で朝鮮語を教えたことも標準形の習得を進めるのに影響を与えた可能性があると思われる。

【語彙面】

話者2において、話者1と同様、「トイレ」を「변소」([pjɔn-so]【便所】)、「風呂」を「목간」([mo^k-kan]【沐間】)と回答しており、古い語彙の化石化が見られる。

5-3. 話者3の定性的分析

【言語使用歴】

話者3は、静岡県で生まれ、生後～幼少期の間の一時期、韓国にいたことがある。その後、幼少期から現在まで東京都で暮らしている。幼少期から現在まで住んでいる地域には親戚の呼び寄せで引越してきたという。近所に同胞は多かったが、出身地までは分からない。幼少期は父・母とともに暮らし、日本の学校に通った。9～10歳頃に、民団の事務所で朝鮮語を学んだことがある。朝鮮語は主に親が使ったことばを覚えた。母親との会話で最もよく朝鮮語を使った。

現在、朝鮮語を学習している娘から、朝鮮語について質問を受けることがあるが、答える際に出るのが「昔のことばになっちゃう」という。朝鮮語は「文を話せる」レベルと自己認識しており、家でも子どもに対し、方言で、お風呂に入りなさい等ということがある。

韓国には年1回程度、道民会の集まりで旅行に行く。主に観光を目的としている。民団には月1～2回、道民会には月1回参加している。

【音声面】

話者3は、「骨」(뼈, [pʰjo])、「ヤンニョムジャン」(양념장, [jaŋ-njɔm-dʒaŋ])、「かんどし」(비녀, [pi-njo])、「すずり」(벼루, [pjɔ-ru])、「ひよこ」(병아리, [pjɔŋ-a-ri])、「嫁」(며느리, [mjɔ-nw-ri])の各単語の発音において、慶尚道方言の音韻的特徴である半母音j/のゼロマーキングが観察された。

具体的には、「骨」は[pʰi^h-ta-gul]、「ヤンニョムジャン」は[jaŋ-nim]、かんどしは[pi-ne]、「すずり」は[pi-ru]、「ひよこ」は[pʰi-ga-ri]、「嫁」は[mi-nw-ri]と実現されている。

半母音/j/のゼロマーク化が多く単語で現れていた。話者3は、これらの単語において標準形は観察されず、もっぱら方言的発音のみが現れていた。

話者3においても、慶尚道方言の音韻的特徴である軟口蓋音の口蓋音化が観察された。観察された単語は、「キムチ」(김치, [kim-tʃʰi])、「柱」(기둥, [ki-duŋ])、「油」(기름, [ki-rum])、「縫う」(깁다, [ki:p-ʰta])の4つである。「キムチ」(김치, [kim-tʃʰi])は[tʃim-tʃʰi]、「柱」(기둥, [ki-duŋ])は[tʃi-don]、「油」(기름, [ki-rum])は[tʃi-rum]、「縫う」(깁다, [ki:p-ʰta])は[tʃi:p-ʰta]、[tʃin-nun-da]とそれぞれ発音されていた。一方、「深い」は/k/の発音が/tʃ/で実現されず、[ki-phur-da]と発音されていた。

話者3においては、方言形の発音が比較的多く表れている。生後一時的に韓国にいたこと、幼少期から母親との会話で朝鮮語をよく使ってきたこと、周りに在日コリアンの多い環境で生育したこと等から、慶尚道方言を習得する機会が多かったのではないかと思われる。また、自身が親になってからも、家庭内で、時折、単語あるいは文レベルで朝鮮語を使用することがあったと回想していることから、幼少期に習得した慶尚道方言が家庭内での使用を通じて維持されてきたことが伺える。

【語彙面】

話者3は、話者1、話者2と同じように「風呂」を「목간」([mo^k-ʰkan] 【沐間】)と回答した。

「トイレ」については「통시」([tʰon-ʃil])と回答した。「통시」([tʰon-ʃil])は、1910年～1930年代に方言調査を行った小倉(1944ab)に基づく中井・亀山(2007)の言語地図において、慶尚道内での分布が確認できる。このことから、一世の移住当初の慶尚道の方言形が維持されていることが示唆される。「변소」([pjɔn-sol] 【便所】)は日本に来てから覚えたと話している。このことから「변소」([pjɔn-sol] 【便所】)が在日コリアンのコミュニティで使用されてきた語彙であることが示唆される。

「葬式」に対して、現代朝鮮語では「장례」([tʃa:ŋ-ne])が広く使われるが、話者3は「葬式」として「초상」([tʃʰo-saŋ] 【初喪】)を使用すると回答した。これも古い語彙の化石化と言える。

話者3によると、「葬式する」に対して「초상하다」と用いるという。金美善(2001)は、大阪府生野区在住一世の間で「초상처する」という「動詞の連用形(초상처) + する」の混用表現が用いられていることを指摘しているが、このような混用表現は使っていないとのことである。

5-4. 話者4の定性的分析

【言語使用歴】

話者4は、新潟県で生まれ育つ。幼少期は父母、祖父母とともに暮らす。高校入学前後で東京都に移住し、高校1年生の時に一年間、朝鮮学校で寮生活を送った。

朝鮮語は、家庭および朝鮮学校の寮生活で身につけた。

韓国には、年1回程度、道民会の集まりで旅行に行く。主に観光と親戚訪問を兼ねている。親戚訪

間では、慶尚北道に多くいる親戚にも会う。韓国では、ご本人が話すと「朝連系の学校だったから、若い人は聞いて下さる」が、高齢の人は話者4とは発音が違うため聞き取ってもらえないことがあるという。

自身の朝鮮語能力は「文を話せる」レベルだと認識している。朝鮮語を使う相手は、祖父母が多かった。親は商売をしていたため、日本語を使うことの方が多かった。

民団に所属し、旅行に参加している。道民会には月1回参加する。

【音声面】

話者4は、「かんざし」(비녀, [pi-njɔ])、「ひよこ」(병아리, [pjɔŋ-a-ri])、「嫁」(며느리, [mjɔ-nu-ri])の各単語の発音において、慶尚道方言の音韻的特徴である半母音j/のゼロマーキングが見られた。「かんざし」は[pi-ne]、「ひよこ」は[^hpi-ga-ri]、「嫁」は[me-nu-ri]と発音されていた。一方、「骨」(뼈, [pjɔ])、「ヤンニョムジャン」(양념장, [jaŋ-njɔm-dʒaŋ])の各単語は標準形で発音されていた。

話者4においても、慶尚道方言の音韻的特徴である軟口蓋音の口蓋音化が観察された。具体的には、「キムチ」(김치, [kim-tʰi])、「油」(기름, [ki-rum])、「縫う」(깎다, [ki-p^h-ta])の3単語である。「油」は、方言形に加えて標準形でも発音されている。一方、「瓦」(기와, [ki-wa])、「瓦屋」(기와집, [ki-wa-dʒip])、「深い」(깊다 [ki-p^h-ta])については/k/の発音が/tʃ/で実現されず、標準形で発音されていた。

話者4においては方言形が発音されるだけでなく、単語によっては標準形の回答があるのは、高校一年生での朝鮮学校の寮生活による習得経験が影響しているのではないかと考えられる。

【語彙面】

話者4においても古い語彙の化石化が見られた。具体的には、「風呂」について「목간」([mo^k-kan]【沐間】)を使用すると回答した。また、「葬式をされた」に対して「초상하셨다」と使うと答えた。

5-5. 話者5の定性的分析

【言語使用歴】

東京都で生まれ育つ。話者5が最も長く住んでいた地域の近所には在日コリアンが住んでいたが、出身地はそれぞれ異なっていた。幼少期は、父・母とともに暮らし、家庭で方言を習得した。学校は日本の学校に通った。

韓国には年に4～5回訪問する。目的は親戚訪問と観光である。親の墓が韓国にあるため、墓参りにもよく行く。観光には道民会の旅行で行く。

朝鮮語は家庭で方言を身につけた。自宅内では朝鮮語を使用するよう親から教育を受けた。標準語については、NHKのラジオ講座での1年間の学習とTVドラマを通して身につけた。自身の朝鮮語

能力は「80%以上」と認識している。

民団にはほぼ毎回出席している。道民会には1年おきに行われる年1回の旅行に参加している。

【音声面】

話者5は、「骨」(뼈, [pʰjɔ])、「ヤンニョムジャン」(양념장, [jaŋ-njɔm-dʒaŋ])、「かんだし」(비녀, [pi-njɔ])、「ひよこ」(병아리, [pjɔŋ-a-ri])の各単語の発音について、慶尚道方言の音韻的特徴である半母音 /j/ のゼロマーキングと標準形の両方を回答した。具体的には、「骨」は方言形の [pʰetʰ-ta-gu] と標準形の [pʰjɔ] が発音されていた。「ヤンニョムジャン」は方言形の [jaŋ-nim] と標準形の [jaŋ-njɔm] が発音されていた。「かんだし」は方言形の [pi-ne] と標準形の [pi-njɔ] が発音されていた。「ひよこ」は方言形の [pʰi-ga-ri] と標準形の [pjɔŋ-a-ri] が発音されていた。なお、「すずり」(벼루, [pjɔ-ru])、「嫁」(며느리, [mjɔ-nu-ri]) については方言形を回答した。

話者5においても、慶尚道方言の音韻的特徴である軟口蓋音の口蓋音化が観察された。観察された単語は、「柱」(기둥, [ki-duŋ])、「瓦屋」(기와집, [ki-wa-dʒiɸ])、「油」(기름, [ki-rum])、「縫う」(깎다, [kiː˦˥˩-ta]) の4つである。「柱」(기둥, [ki-duŋ]) は [tʃi-doŋ]、「瓦屋」(기와집, [ki-wa-dʒiɸ]) は [tʃe-dʒiɸ]、「油」(기름, [ki-rum]) は [tʃi-rum]、「縫う」(깎다, [kiː˦˥˩-ta]) は [tʃin-nun-da]、とそれぞれ発音されていた。なお「瓦屋」(기와집, [ki-wa-dʒiɸ])、「油」(기름, [ki-rum]) については方言形に加えて標準形の発音も回答されていた。「キムチ」(김치, [kim-tʃʰi])、「深い」(깊다, [kiː˦˥˩-ta]) については標準形のみで発音されていた。

話者5は、ほとんどの場合に、どちらの発音が方言形でどちらの発音が標準形なのかについて言及していた。話者5は、自宅では朝鮮語を使用するよう教育され、方言をよく使いながら生育し、現在も頻繁に墓参り等で親戚訪問をしている。その一方で、後年にはラジオ番組での学習や韓国ドラマの視聴、観光旅行等で標準語との接触も増えた。そのため、方言と標準語の両方を習得したのではないかと考えられる。

【語彙面】

話者5は「トイレ」に対して「똥구시」([pʰtɔŋ˦˥˩-ku-ʃi]) を用いると答えた。「똥구시」([pʰtɔŋ˦˥˩-ku-ʃi]) も話者3の「통시」([tʰɔŋ˦˥˩-ʃi]) と同じように、1910年～1930年代の言語地図(中井・龜山 2007)において慶尚道内での分布が確認できる。ここから一世の移住当初の慶尚道の方言形が維持されていることが伺える。

「風呂」については、現代朝鮮語の「목욕탕」を使用する。もしくは、「風呂に入る」について、「風呂」を意味する古い語彙の「목간」([moː˦˥˩-kan] 【沐間】) を使用し、「목간에 들어」 という混用表現を使うことがあるという。

5-6. 話者6の定性的分析

【言語使用歴】

千葉県で14歳頃まで生まれ育つ。近隣は日本人だけだったと記憶している。その後東京都に移住し、その後は現居住地で生活している。近所に同胞は住んでいるが、出身地は分からない。これまで通った学校は日本の学校のみである。結婚前に、民団の支部で数か月朝鮮語を学習したことがある。

韓国にはこれまでに三回訪問した。

自身の朝鮮語能力については、話すことはできないが文を聞き取ることができる。また、字が読めるレベルだという。読む能力は民団の支部で朝鮮語を学習した際に身につけた。

民団の活動には年3回ぐらい参加している。道民会には年1回程参加している。

【音声面】

話者6は、「かんざし」(비녀, [pi-njɔ]), 「嫁」(며느리, [mjɔ-nu-ri]) の各単語の発音において、慶尚道方言の音韻的特徴である半母音 /j/ のゼロマーキングが見られた。また、「ヤンニョムジャン」(양념장, [jaŋ-njɔm-dʒaŋ]) については、半母音 /j/ のゼロマーキング [jaŋ-nim] と標準形 [jaŋ-njɔŋ-dʒaŋ] の両方で発音されていた。

話者6においても、慶尚道方言の音韻的特徴である軟口蓋音の口蓋音化が観察された。観察された単語は、「油」(기름, [ki-rum])、「縫う」(깎다, [ki:^p-²ta]) の2つである。「油」(기름, [ki-rum]) は [tʃi-rum]、「縫う」(깎다, [ki:^p-²ta]) は [tʃin-nun-da]、とそれぞれ発音されていた。一方、「キムチ」(김치, [kim-tʃi])、「深い」(깊다 [ki:^p-²ta]) については標準形のみで発音されていた。

話者6は、在日コリアンが周囲に少ない環境に育ち、聞く技能、読む技能を中心に習得した話者である。回答された単語数が相対的に少ない中で方言形と標準形がそれぞれ回答に現れたのは、家庭内で方言を聞いて習得した一方で、民団支部での学習等を通して標準語を習得したためではないかと考えられる。

【語彙面】

話者6は、「トイレ」を「변소」([pjɔn-sol] 【便所】)、「風呂」を「목간」([mo^k-²kan] 【沐間】)と回答した。「風呂に入る」という意味で使われる「목간に入る」という表現を聞いたことがあるという。話者6において古い語彙の化石化が見られる。

6. おわりに

本稿では、一世によって祖国からもたらされた慶尚道方言が日本の地で朝鮮語の諸方言や日本語と接触した結果どのような変容を遂げているかを探るための調査研究の途中段階の報告として、首都圏に在住する慶尚道出身の二世の事例について定性的に考察した。

調査の結果、調査対象者の音声面において、慶尚道の方言的特徴である、半母音/j/のゼロマーキングおよび軟口蓋音の口蓋音化の事例が確認された。語彙に関しては古い語彙の化石化が観察された。

今後は定量分析に耐え得る程度に被験者数を増やし、Trudgill (1986)、Britain (2018) 等の枠組みを用いて、方言接触に関する理論的検証を行っていききたい。

謝辞

本調査を開始、継続することができたのは、東京大学の張暎洙さん・お祖母様⁸の惜しみないご支援のおかげである。心から感謝の意を表す。慶尚北道道民会婦人部会長の金仁淑様、民団文京区婦人会会長の金恩淑様からも大いにご支援頂いた。深く感謝を表す。そして、本調査に快く応じて下さった協力者の皆様方に改めてお礼申し上げる。

また、調査実施や人口統計のデータ作成に当たり、東京大学の金延姫さんに大変ご協力頂いた。ここにお礼申し上げる。

参考文献

- 小倉進平 (1944a) 『朝鮮語方言の研究』上巻, 岩波書店
 小倉進平 (1944b) 『朝鮮語方言の研究』上巻, 岩波書店
 生越直樹 (2005) 「在日コリアンの言語使用意識とその変化—ある民族学校でのアンケート調査結果から—」『在日コリアンの言語相』(真田信治・生越直樹・任榮哲編), 和泉書院
 韓国政府国家記録院 「在外韓人の歴史 日本の在日韓人」
<http://theme.archives.go.kr/next/immigration/underJapaneseimperialism.do>
 康貞姫 (2003) 「言語接触と言語変化—大阪居住の済州方言話者集団における日本語との接触現象について—」『東アジア研究』37, 大阪経済法科大学アジア研究所
 金美善 (2001) 『在日コリアンの言語接触に関する社会言語学的研究：大阪市生野周辺をフィールドとして』(平成十二年度博士論文), 大阪大学文学研究科日本学専攻
 金美善 (2010) 「在日コリアンと言語」『在日コリアン辞典』
 金由美 (2005) 「残存韓国語語彙の様相—ある在日2・3世の場合—」『在日コリアンの言語相』(真田信治・生越直樹・任榮哲編), 和泉書院
 宋実成 (2010) 「在日朝鮮人による朝鮮語の継承・使用について—幼少期に渡日した1世と日本で生まれ育った2世の事例—」『ことばと社会：多言語社会研究』12 (『ことばと社会』編集委員会編), 三元社
 趙義成 (2007) 「慶尚道方言とソウル方言」, 『韓国語教育論講座』第1巻, pp.203-219
 坪江汕二 (1965) 『在日本朝鮮人概況』, 巖南堂書店

8 本稿の調査協力者であるため、御名前は非公開とさせて頂いた。

- 中井精一・亀山大輔編 (2007) 『朝鮮半島言語地図』, 富山大学人文学部
- 野間秀樹 (2007) 「音声学からの接近」, 『韓国語教育論講座』第1巻, pp. 221-255
- 福井玲編 (2017) 「小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈—第1集」, 東京大学人文社会系研究科 韓国朝鮮文化研究室
- 福井玲編 (2018) 「小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈—第2集」, 東京大学人文社会系研究科 韓国朝鮮文化研究室
- 松本和子 (2016) 「社会言語学の研究動向と方言研究との接点—接触日本語変種の研究を中心に—」(特集「日本方言研究の50年を振り返る」) 『方言の研究』2, pp. 131-150.
- 松本和子・奥村晶子 (2019) 「在日ブラジル人移民のコイネー形成—方言接触、創始者効果、フィーチャープールの検証—」 『社会言語科学』22 (1)
- 法務省 「在留外国人統計 (旧登録外国人統計) 統計表」
http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html
- Britain, D. (2018) Dialect contact and new dialect formation. In C. Boberg et al. (eds.), *Handbook of dialectology*. Oxford: Blackwell.
- Trudgill, P. (1986) *Dialects in contact*. Oxford: Blackwell.